

## 韓国での研究生活

誠信女子大学校人文学部 専任講師

**藤井 勉** (ふじい つとむ)

2003年に東京学芸大学に入学したとき、それまで茨城から出ることはないと思っていた私が、およそ10年後に韓国で生活し、この原稿を書いているとは想像できませんでした。海外経験とは程遠い人生だと思っていましたが、転職は急にやって来るものです。縁あって2012年9月に現在の本務校に異動しました。

韓国は地理的には日本に近いものの、多くの違いを感じます。たとえば、韓国の高校生は放課後も学校に残って22時頃まで勉強しますし、大学の図書館も24時間開いているところが多く、勉強時間がとても長いです。

また、多くの大学生は4年間で卒業せず、アメリカや日本、中国など諸外国へ留学します。この理由は複雑で、外国で学びたいという純粋な意欲もあれば、就職のためにスペック (spec) が必要であるという現実も影響しています。日本では、大学の成績はさほど就職に影響せず、採用面接の自己アピールに重点が置かれていると思います。しかし就職率の低い韓国では、面接の前提条件として、たとえばTOEIC800点以上、留学経験を有するなど、高スペックが要求されることが多いです。大学時代の私のように、毎日のんびり起きてバンドの練習に行き、たまに授業に出るような生活をしていれば淘汰されます。こうした背景もあり、多くの学生は在学中に資格取得や、留学経験の蓄積などに時間を割きます。

そして成績も重要です。日本で

は成績判定後の異議申請は珍しいですが、韓国では「なぜ私の成績がこんなに低いのですか」という問い合わせが頻繁に飛んできます。この成績に学歴、TOEIC、語学研修、資格を加えた「就職の5大項目」なるものがあるそうです (最近はこれに受賞歴、ボランティア、インターン、そして見た目をよくするための整形も含めた9大項目だという話も聞きました)。

さて、現在の私は潜在連合テスト (Implicit Association Test : IAT) などを用いたパーソナリティの測定を中心に、データの収集や公表を続けています。また、国際学会や韓国で知り合った研究者との共同研究にも着手しました。たとえば、これまで研究が重ねられてきた自己報告による顕在的自尊心だけでなく、潜在的自尊心も測定し、それらと精神的健康の関連について日韓比較を行ったりしています。

韓国心理学会の学術誌『韓国心理学会誌：一般』を参照し、近年の韓国の研究動向を調べてみると、愛着、許し、自尊心の安定性、自己制御など、日本の学会誌でも目にする用語が多く、日本と同様に、心理尺度の作成や既存の尺度の短縮版作成を試みた論文も目立ちました。一方で、私が行っている潜在的測度を用いて自尊心などを測定する研究はほとんどありませんでした。

欧米の研究では、顕在的自尊心と潜在的自尊心の間のズレが大きいと、自殺念慮が高いという知見



### Profile—藤井 勉

2009年、東京学芸大学大学院教育学研究科学校心理専攻修了。2010年、学習院大学大学院人文科学研究科博士後期課程中途退学。学習院大学助教を経て2012年より現職。専門はパーソナリティ心理学、社会心理学、教育心理学、潜在的測定法、動機づけ。著書は『誠信 心理学辞典 [新版]』(分担執筆、誠信書房)など。

があります。その他にも、潜在的自尊心は、困難な課題に直面した際の動機づけの低下を防ぐという研究もあります。韓国はOECD加盟国の中で自殺率が最も高く、深刻な社会問題になっていますし、先述のように成績が重要ですから、学生はテストの際に困難を強く感じると考えられます。こういった環境だからこそ、韓国は潜在的自尊心の効果の検証に適しているといえるでしょう。実際にデータを収集したところ、潜在的自尊心と顕在的自尊心との間にズレがある学生は抑うつや孤独感が高いことが分かりましたし、潜在的自尊心が高い学生ほど、試験後のネガティブ感情が生じにくいことも分かりました。韓国への異動は、「潜在」の研究が実際の現場に生きるかどうかを調べる好機を私に与えてくれたのです。

日本に戻り授業や学生指導に再度携わる日を楽しみにしつつ、こうした研究を続けています。